

一 次の——線部①②③④⑤⑥⑦⑧のカタカナを漢字で、⑨・⑩の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

いずれも一画一画をていねいに書くこと。

前途①ヨウヨウたる若者達が語り合う。

乱れた国を②チュウコウする。

自信作だと③ムネを張る。

体調をくずして④フクヤクする。

トラックが到着⑤して⑥シウカの作業をする。

⑦フクシンの部下が活躍⑧する。

二人はかつて⑨メイユウであったが、今は敵対⑩している。

友人が⑪ヘンゴしてくれた。

幼い子供の笑顔で場が⑫和む。

老若⑬男女に人気のアーティスト。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

長年棋士として活躍してきた国芳は「棋将」という名称のタイトル保持者である。国芳は弟子の生田と、「棋将」の座をかけて師弟対決をすることになる。その棋将戦の対戦に使われる駒は、駒職人の兼春（春峯）の彫った駒か、兼春にとって駒彫りの師匠である白峯の駒のどちらかであった。選ぶのは国芳である。最終的に国芳が選んだ駒は、白峯の彫った駒であった。兼春はなぜ自らの駒が国芳に選ばれなかったのかとやんだ。そこで、駒選びの場にも立ち会っている小平から話を聞く。

なお、「恩返し」とは将棋用語で、弟子が力をつけて師匠と戦い、弟子が勝って「指導のおかげ」と頭を下げることである。

駒職人	棋士	師匠	弟子
白峯	国芳	生田	兼春＝春峯

小平は手を叩き合わせる。

「恩返しですよ。で、私はこう思ったわけです。もしかしたら、国芳棋将は春峯さんと白峯さんのやり取りを聞いて、自分はまだまだ恩返しをさせるわけにはいかないと思っただんじやないか、ここで、駒師の師弟戦で弟子を勝たせるのは縁起が悪いと思っただんじやないかって」

「縁起？」

はい、と小平は顎を引いた。

「つまり、国芳棋将は白峯さんと春峯さんの関係に、自分と弟子の関係を重ねて見たんじやないかと思っただんじや。それで、絶対にここは譲らない、という自分への戒めというか、決意表明のために、師匠である白峯さんの駒を選び直したんじやないかって」

小平が帰ってから、残された言葉は兼春の頭の中で渦巻き続けていた。

あれは、国芳棋将の決意表明だった。

その解釈は、妙に納得できるもののような気がした。

たしかに、あのとき国芳棋将は何かを決意しようとしているように見えた。駒を何度も指し比べながら、駒自体よりも、自分自身の何かを見定めようとするかのような——

兼春は、どこか狐につままれたような気持ちになりながらも、工房へ戻った。中断していた作業を再開するために、席に座り、彫り台と印刀を持って構える。

小平の解釈が真実だとしても、まったく的外れだとしても、^①これ以上自分が気に病み続けるのが馬鹿げていることはたしかだった。とにかく自分は、自分の信じる道を進み続けるしかない。

意を決して、印刀を字母紙に押し当てる。力が入りすぎないように意識しながら刃先を滑らせ——そこで手を止めた。

——やはり、勘は戻っていない。

注1 字母紙：字を記した紙のこと。これを木地にはり、その上から彫っていく。

いくら心理的な問題だったからといって、気にかかっていたことへの答えが与えられたくらいでは、急には元に戻らないということだろう。

だが、ここで考えを巡らせていても仕方ない。結局のところ、身体に覚え込ませた勘は、身体を動かすことでしか取り戻せないのだ。

兼春は新しい駒木地を取り出し、一から工程をやり直すことにした。商品を作るためではなく、技術の鍛錬として、一つ一つの工程を丁寧に直していく。

刃先が迷い、指が震えるたびに、よくやった方だ、という甘い声が浮かんだ。そもそも目標自体が大それていたのだ。自分には望外とも言えるほどの結果を出せたではないか。

すぐに焦点がぶれる老眼をこすると、もう世間的にはとっくに定年を迎えている歳なのだということがい出された。何も、恐怖に飲み込まれるほど自分を追い詰めることはない。もっと気楽に、人生を

楽しめばいい——それでも、せめてこれまで通りに戻せるまではと続けてふた月が経った頃、棋将戦七番勝負が終了した。

結局、勘は完全には戻らなかった。けれど、戻らないなら戻らないなりに、身体には新たな感覚が刻まれてきている。

棋将戦の約三ヶ月にも及ぶ激しい戦いを制したのは——国芳棋将ではなく、弟子の生田拓海だった。

国芳棋将は、実に二十二年ぶりに、すべてのタイトルを失冠したのだった。

兼春は、将棋中継ではなく、夕方のニュース番組で、その報を知った。そして、妻と共に、無言のまま、国芳棋将の記者会見を観た。

対局直後の国芳棋将の身体は、まるでこの二日間を飲まず食わずで過ごしていたかのように縮んで見えた。白髪交じりの頭は乱れ、背は丸まっている。

だが、その表情は、どんな感情も悟らせないほど静かだった。

疲れ果てて生気を失っているわけでも、敗北への屈辱に強張っているわけでもない。

ただ、淡々と、他人の対局について解説するかのよう、「力不足でした」と告げた。

最後までどうなるかわからない接戦だったと思いますが、取材者はフォローするように言ったが、「3七桂の時点で、もうかなり難しかったと思います」と低く答える。

別の、どうやら将棋専門の記者ではないらしい取材者が、これで二十二年ぶりの失冠となるわけですが、と躊躇いがちに切り出すと、「そうですね」とうなずいた。

その後につけられる言葉を取材者は待ったようだったが、国芳棋将はもう答えることは答えたというように、唇を閉じている。取材者は、ええと、と口ごもってから、「国芳棋将は」と落ちた沈黙を破った。

しかし、国芳棋将は穏やかとも言える空気をまとったまま、

「私はもう棋将ではありません」

と言った。

場の空気が凍ったのが、画面越しにも伝わってくる。

大変失礼いたしました、と頭を下げる取材者に、国芳棋将——国芳英寛は、「（こちらこそ）と会釈をした。

その、怒気を感じさせない優雅な素振りには、^②「そうであるがゆえに異様だった。兼春は、背筋が冷えていくのを感じる。」

この人は、本当に取材者に対して怒っているわけではないのだとわかった。だが、それでも訂正せずにいられない激しさが、この人の中にはある。

あの、今の、率直なお気持ちをお聞かせいただけませんか、と取材者は恐る恐る尋ね直した。おそらく、どう呼べばいいのかわからなかったのだろう。発言の前に不自然な間がある。

実際のところ、兼春としても彼についてどう呼称するのがふさわしいのかわからなかった。複数のタイトルで永世称号を持つているはずだが、永世称号は原則的に引退後に名乗ることが可能になるものだ。前例から言えば、前棋将を名乗ることも許されるけれど、本人がどういう意思でいるのか

わからない。段位が九段であることは間違いないとはいえ、長くタイトルを持ち続けていたために、もはや国芳九段という響き自体に違和感がある。

——タイトルの有無によって呼称が変わるとするのは、何と **A** ことだろう。

周囲としてはそのつもりがなくても、まるで手のひらを返したような印象すら受ける。

そして、それは将棋の歴史において、幾度となく繰り返されてきたことなのだ。

かつて、華々しいデビューからわずか三年でタイトルを三つ奪取し、国芳英寛と七大タイトルを分け合う二強時代を築いて将棋ブームまで巻き起こした宮内冬馬も、その翌年には防衛を果たせずにタイトル戦の舞台から姿を消し、順位戦でも二度降級するというスランプに陥った。

そのまま八年が経ち、話題に上ることもなくなっていった彼が、再び注目されるようになったのは、今から二年前——将棋ソフトの活用によって低迷期を抜け出したとされる宮内は、まるで忘れ去られていた時期などなかったかのように、将棋界の中心人物としてはやされている。

強ければ、誰からも一目置かれる。そして、勝てなくなれば、否応なく向けられる目は減っていく。あるいはそれは、将棋が誰にでもできる、運の要素が介在しないゲームだということも関係している

かもしれない。スポーツと違って、ルールさえわかれば誰にでも指すことができる。すべては盤上で明らかになれば、ただ、手を読む頭脳だけが問われる。だからこそ、その先で広がる差が途轍もなくシビアに横たわるのだ。

そして、この男は、そうしたほとんど狂気とも **B** 一重の世界の中で、頂点に君臨し続けてきた。

画面に映る国芳の顔は、フラッシュの光で間断なく照らされている。その上に、対局前検分^{注4}で響き続けていたシャッター音が重なった。

きっと、この会見場には、あるときよりもたくさんの報道陣が詰めかけているのだろう。二十二年ぶりの無冠というニュースを伝えるために、無数のカメラのレンズが、国芳へ向けられている。

「来るべきときが来たのだらうと感じています。でも、私はこれで終わるつもりはありません」

^③ 国芳は、躊躇いも気負いも感じさせない口調で言った。

注2 定年を迎えている歳、会社や役所の勤め人が、一定の年齢で退職することが求められる、その年齢のこと。

注3 3七桂「同銀」歩打ち「8二玉」「1六香」などと同様に将棋の駒をどのように動かしたかの記録。

注4 対局前検分、対局者が実際の対局室で、空調や照明、座布団やひじかけ、駒や盤などを確認すること。

兼春の脳裏で、小平の言葉が反響する。

『口さがない将棋ファンの中には、さすがに国芳棋将の時代もこれで終わりだろうなんて言うやつもいるんですよ』

④この人は、知っているのだ。

ぶるりと、背筋に悪寒のようなものが走った。

国芳は、自分について世間がどんなことを言っているのか、理解している。——世間が自分に何をみて、何を期待しているのか。

夢や希望を託され、羨望や妬みを向けられ、一つタイトルを失冠することに落胆や激励や安堵や嘲笑の声を聞きながら、それでも盤の前に座り続けてきた。

たった一人の人間が背負うには、あまりに重すぎるものの中心に立ち続けた二十二年間。

これまでだってそれらを撥ねのけて結果を出してきたのだから、大丈夫なのだろう、きつと常人では想像もつかないような精神力があるのだ、と片付けるのは短絡的だ。

日々成長し、絶頂期へと上り詰めていく間と、そこから下降していくときの精神が同じであるはずがない。

自分はもう終わりへ向かっているのか——それはおそらく、誰よりも国芳自身が考えてきたことなのではないか。

〈最近将棋ソフトを研究に使っておられるという話を聞いたのですが〉

質問を重ねたのは、先ほどとは別の取材者だった。

〈はい、使っています〉

国芳は短く答える。

そこで口を閉ざしたので、もう答えは終わりだろうかと思ったが、数秒して、国芳は再び口を開いた。

〈ただし、まだ使い慣れていません。それなのに、長く使い込んだような振りをしようとしていたと、第二局の直前に気づきました〉

第二局の直前——国芳の言葉に、何かを考えるよりも早く、身体の内側が強張る。あの、対局前検分の頃——そう考えた瞬間だった。

ふいに、ぞろりと内臓を撫で上げられたような落ち着かなさを感じる。

何だろう。これは。何かを自分は知っている。この言葉——自分は、これとよく似た言葉を、耳にしたことがある。

『新しいうちから長く使い込んだような振りをする必要はない』

とん、と頭上から降ってくるように響いたのは、師匠の声だった。

ああ、そうだ。

霧が晴れるように、鮮明にその映像が浮かび上がる。

師匠は、面取りを深くして駒の滑りを良くしようとする自分に対し、この言葉を口にしていった。

注5 面取り＝駒の角を少し削ること。

そして、あのとき、国芳は駒を選び直す直前に、駒の角を指でなぞっていた。

さらに兼春の脳裏に、小平の笑顔が蘇る。

『いやあ、この駒で指すだけで将棋が上手くなった気がしますよ』

小平は、国芳はまだ弟子に勝ち譲らないと、タイトルを守り抜くのだという決意のために、師匠の駒を選んだのではないかと言った。

だが——それは、逆だったのではないか。

国芳は、それまでに長い時間と労力をかけて積み上げてきた自分の将棋を壊そうとしていた。

『道具は使い手が育てるんですよ。どんどん使う人の手に馴染んで、色合いも良くなっていく』

だから師匠の駒は、自分の駒に比べて面取りが浅い。立った角は、指に刺激となつて引つかかる。まだ使い込まれていないことを、これから育つていくことを象徴するように。

〈もう一度、自分を鍛え直します〉

国芳は、真つ直ぐに前を向いて言った。

フラッシュが、それまでよりもさらに激しく、その顔を照らす。

〈今回、お弟子さんである生田七段が「恩返し」をされたわけですが、今の率直なお気持ちをお聞かせ願えますか〉

⑤取材者の言葉に、初めて国芳が微かに表情を和らげた。

〈彼とこうして本気で指すのは久しぶりでした。いや、ここまで一局に長い時間をかけて指したのは初めてかもしれません。タイトル戦という最高の舞台で、全力でぶつかり合えたことを嬉しく思います〉

——全力で、と言いきるのだ。

力を出しきれなかったと、そうでなければ結果は違ったかもしれないと仄めかすのではなく。

〈本当に、楽しい時間でした〉

国芳は、取材者に答えるというより、ひとりごちるように遠い目をした。

〈いや、あそこで同銀と来るとは、まったく予想もしなかったんですよ。だけど指されてみればなるほど、なんです。あれで八手前の歩打ちが意味を持つてくる。本譜は八二玉でしたが——〉

徐々に口調が速くなり、声のトーンが上がっていく。

そのまま、ほとんどまくし立てるように符号を口にし続け、途中で一瞬言葉を止め、隣にいる生田に〈「一六香は」と投げかけた。生田は報道陣をちらりと見てほんの少し戸惑いを表したものの、口頭で手を返し、国芳がさらに符号を積み重ねていく。

まるで、唐突に感想戦が始まってしまったかのようなだった。

敗着はどこにあったのか、どの手を変えていけばどう盤上の光景が変わったか。無数の分岐に光を当て、対局者自身がたった今終えたばかりの戦いについて検討する——それは将棋における伝統の一つだが、考えてみれば異様な行為だ。

対局中は各々の頭脳に閉じ込めていた思考を解放し、敗者の傷を抉りながら協力して可能性を掘り起こす。何手目について考えよう、と話し合うこともなく、暗黙の了解のように問題の局面に戻り、片方が本譜と異なる手を指せば瞬く間にその後の展開が盤上に編み上げられていく。

彼らの頭の中には、棋譜だけでなく、対局中に思考に浮かんだ分岐までもが完全に記憶されている。だから、周囲には到底追いつけないような速さで会話が成り立つのだ。

兼春としても、対局自体よりもむしろわかりやすい形で彼らの超人ぶりがうかがえる感想戦を中継で見るのは好きだった。だが、今は記者会見の場であり——そもそも、この対局の感想戦は先ほど既に終わっているのだ。

おそらく、この会見のために感想戦を早く切り上げることになり、検討し足りなかった部分が局面を思い返したことで噴出してきてしまったのだろう。

しかし、周囲にいる人間のほとんどが理解できない言葉を饒舌に語る国芳の姿は、二十二年もの間、将棋界の頂点に君臨し続け、絶対王者として神格化さえされてきた大ベテランのものではなかった。

少なくとも兼春の記憶にある国芳英寛は、常に穏やかで知的な人格者として振る舞い続けてきた。今は弟子とのタイトル戦の直後ということもあり、精神が高揚しているのだろう。ただ、それでもこれは——きつと、ずっと彼の核にあった姿なのだ。

将棋が好きで好きで好きすぎて、一般的な社会人が歩む道をすべて切り捨てて将棋にのめり込み、頂点に立って何年経とうが満たされることも飽きることもなく、まだ新しい一手にここまで目を輝かせられる人間。

これだけプレッシャーがかかる立場に置かれていながら、勝敗に飲み込まれることなく、将棋を愛し続けていられる異常な精神。

国芳には、目的も目標も必要がない。ただ将棋の可能性をもっと自らの目で見たいというだけで、自分を、戻るべき足場を躊躇いなく壊せる。

その熱量が、狂気でなくて何なのか。
〈では、今回の対局は、素晴らしい恩返しだったと〉

取材者がまとめるように言うと、国芳はしゃべりすぎたことに気づいたのか、恥じるように目を伏せ、へええ、そうですねとわずかに上ずった声のまま答えた。

〈これ以上の恩返しはないでしょう〉

国芳が、隣の生田と視線を合わせた瞬間、待ちに待ったようにフラッシュとシャッター音が溢れ返る。

それでは次に、初戴冠となった生田新将に、という司会のアナウンスと同時に、兼春は席を立った。大股でリビングを出ながら、だからだったのだ、と思う。

だから自分は、国芳英寛に駒を選び直されたことに、あれほど揺さぶられたのだ。心に引っかかり続けていたのは、なぜ選ばれなかったのかではなかった。

この、誰もがかなわないほどの将棋への狂気を持った男が、自分の駒を選び、そして手放す間に、何を見ていたのか。

兼春は、工房として使っている自室に入る。

作業台の上にあった彫り途中の駒を奥へよけ、新しい駒木地を取り出す。

椅子を引き、座りながら印刀と彫り台を手を取った。

途端に、波が引いていくように、心が静かに透き通っていく。

⑥ 兼春は一つ息をつき、刃先を、まだ何も刻まれていない木の欠片へと押し込んだ。

(菅沢史「恩返し」による)

問一 ——線部①「これ以上自分が気に病み続けるのが馬鹿げていることはたしかだった」とありますが、なぜ気に病み続けることが馬鹿げているのですか。もっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 小平の言うとおり、弟子との勝負にこだわった国芳が縁起を担いで師匠の白峯の駒を選んだのだと分かったから。

イ 兼春の彫った駒が選ばれなかったことになやむのは、国芳の決断を非難することになりかねないと感じていたから。

ウ 調子のよい小平の言葉は信用のおけないものだけに、真に受けてもプラスにならないことに気づいたから。

エ 自分の駒が選ばれなかった理由にこだわっているよりも、自分の技をひたすら磨くべきだと分かったから。

問二 ——線部②「そうであるがゆえに異様だった」とありますが、どうしてですか。もっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 失礼なのは取材者なのに、「こちらこそ」と皮肉で返した国芳は並の勝負師ではないから。

イ 将棋への情熱は並々ならぬものなのに、冷静に答えている国芳の態度は普通ではないから。

ウ 場の空気が凍りつくような言葉にも、会釈ですますほど国芳は勝負に集中しているから。

エ 負けた悔しさから、取材者の言い間違いひとつでも見すごせない国芳はまともではないから。

問三 A に入れるのにもっとも適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 愉快な

イ 残酷な

ウ 不可思議な

エ 馬鹿げた

オ 横暴な

問四 B に入れるのにもっとも適切なことを漢字で答えなさい。

問五 ——線部③「国芳は、躊躇いも気負いも感じさせない口調で言った」とありますが、どのような思いでこのように言ったのでしょうか。もっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 今までの自分のやり方を大きく変えてまで勝負に向かった国芳は、敗北を受けいれながら今後を考えている。
- イ 異様な世界だと人々から言われるような将棋界で生きる国芳は、何事にも心を動かされることはないと思っている。
- ウ 弟子と対戦しても無残に負けてしまった国芳は、すでに勝負の世界は自分の生きる世界ではないと考えている。
- エ スランプに陥って勝てなくなった国芳は、人々から注目されなくなるのは引退したも同然であると思っている。

問六 ——線部④「この人は、知っているのだ」とありますが、何を知っているのでしょうか。もっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 国芳がすでに盛りを過ぎた棋士だと噂を流しているのは小平だということ。
- イ 兼春が画面の向こうで、国芳の戦いぶりを冷静な目で見続けていること。
- ウ タイトルを失い続けることで、世の中に国芳の悪口を言う者がいること。
- エ 試合にいくら負けたとしても、国芳を応援する人がたくさんいること。

問七 ——線部⑤「取材者の言葉に、初めて国芳が微かに表情を和らげた」とありますが、この時の国芳の気持ちの説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 呼び方まで知らずに失礼なことばかりするような取材者であったが、かわいい弟子をほめる言葉を聞いて気持ちが落ち着いた。
- イ 勝負の厳しさを思い知らせる言葉をかけてきた取材者が、話題を弟子に振ったことで、勝ち負けだけでない対局の喜びが心に浮かんできた。
- ウ 取材者の話し方にすばらしい対局だったという思いが感じられて、負けた悔しさも多少はなだめられたように感じている。
- エ 「恩返し」は自分のねらった結果であり、自慢の弟子に花をもたせることができたことをうれしく思っている。

問八 ——線部⑥「兼春は一つ息をつき、刃先を、まだ何も刻まれていない木の欠片へと押し込んだ」とありますが、この時の兼春の思いを説明したものとしてみっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 駒が選ばれなかったことにいつまでも納得できずにこだわっているのは、師匠の駒の何が優れているか分からないことに気づき、自分は自分のやり方で師匠を超える駒を彫ろうとあらためて決意を固めている。
- イ 棋将戦の対局に自分の駒が選ばれなかったのは、使いこまれた風を装って角を取ったからなのであり、これからは自分は自分のやり方で新たな駒を彫ること以外に師匠を超える方法はないと思っている。
- ウ 国芳のような常軌を逸した棋士の気にいる駒は、よくよく考えをめぐらせて彫らなければ狙えないことに気づくとともに、自分なりの工夫でも国芳に選ばれた駒を超えるようなものは彫れるはずだと考えている。
- エ 将棋の駒にあらかじめ目指すべき理想があると思いついて、何が師匠に及ばないのかに思い悩んでいたが、師匠はそんなことを超越していたことに気づき、あらためて駒彫りに精進しようとしている。

問九 最終的に兼春は、国芳が白峯の駒をなぜ選んだと考えていますか。三十五字以上四十五字以内で説明しなさい(句読点・記号も一字に数えます)。

三 次の「文章1」・「文章2」を読んで、後の問いに答えなさい。

〔文章1〕

鴻上 二〇二〇年の前半はコロナ禍によってさまざまな風景が現れました。「自粛警察」「マスク警察」といった言葉に代表される、監視や排除の心情、あるいは差別と偏見。そうしたものが一気に炙り出されたと思います。なかでも、より分かりやすいかたちで可視化されたのが、日本社会の同調圧力だったのではないのでしょうか。

同調圧力とは、少数意見を持つ人、あるいは異論を唱える人に対して、暗黙のうちに周囲の多くの人と同じように行動するように強制することです。こうしたものに、僕はいつも、息苦しさを感じています。コロナが怖い、確かにその通りなのですが、それ以上に、何かを強いられることが、そして異論が許されない状況にあることが、何よりも怖い。

もちろんコロナ以前にもさまざまなかたちでの同調圧力は存在しました。たとえば学校や会社のなかで先輩や上司に言われたことはどんなにムチャな命令でも黙って従うべきだとか、会社が苦しいんだからいまは我慢しろとか、さまざまな理不尽を受け入れるしかない空気がありました。僕が以前からくりかえし述べている「^①「空気を読め」の風潮です。それが、コロナによって、明確に、そして狂暴になって現れてきたように感じるんです。コロナは、確かに存在するくせに日本人および日本社会があまりにしていたものを私たちに突きつけた気がします。

〔中略〕

社会の中に感染者を差別、排除しようとする強い空気を感じます。そこには患者への気遣いも同情も見えない。ウイルスは人を選ばないのだから、誰であっても感染する恐れはありますよね。本来、頭を下げて謝るようなことではないと思います。感染者、なかでも若年層の感染者に対しては、この非常時に自粛することなく遊びまわっていたから悪いのだ、と考える人が多いからでしょうが、まさに非難と中傷が同調圧力となって感染者に襲いかかる。

佐藤 僕は最近ずっと、加害者家族に対する「^{注1}バッシング問題」を考えています。日本では、殺人などの重大犯罪が犯された場合、加害者の家族がひどい差別やバッシングを受けます。これは、コロナ感染者に対する差別やバッシングと非常によく似ていると思えました。日本人の間に「犯罪加害者とその家族は同罪」といった意識が浸透しているからです。犯罪被害者への同情や正義感でもありますが、「敵」とみなした相手を一斉にバッシングする排除の論理が働いているのでしょう。一種の処罰感情とも言えます。この同調圧力が、加害者家族を苦しめます。ただし加害者家族に対するバッシング問題は、深刻ではあるけれど、いくつかの例外を除けば、大きな問題として一般に認知される機会はこれまででありませんでした。ところが、加害者家族に対するバッシングとまったく同質の問題が、いま、コロナ禍をきっかけに大挙して噴き出てきたわけです。^③感染者やその家族に向けられた差別やバッシングというかたちで。感染者が悪くもないのに謝罪するのも、そうした圧力があるからですね。

鴻上 コロナがやっかいなのは、無症状の感染者が少なくないことですね。誰が感染しているのか、あるいは自分が感染しているかもしれないといった恐怖と不安が常につきまとう。

佐藤 だからこそ人びとは **A** 暗鬼になり、他人が信じられなくなり、「万人の万人に対する戦い」のなかに叩き込まれます。これはホブズ(Thomas Hobbes)の言葉ですが、人間は法も国家もない「自然状態」になると、お互い殺し合いになるような状況になるという意味です。

鴻上 実際、すさんできましたよね、世の中が。SNSも、ネットニュースのコメント欄も、人を一方的に罵倒したり、非難したりするなど攻撃的なコメントがより目立つようになりました。間違いないでコロナの影響だと思います。

佐藤 そこで考えていかなければならないのは、同調圧力と相互監視によって支えられる「世間」の問題です。

鴻上 いやいよ本題に近づいてきました。

こうした同調圧力を生み出す「世間」とは、いったい何なのか。コロナによって炙り出された風景は、「世間」とどうつながるのか。佐藤さんとじっくり議論していきたいと思っています。

佐藤 「自粛」と聞いて僕がすぐに思い出したのは、二〇一一年の東日本大震災直後に人の姿が消えた異様な街の風景でした。あのとき、被災地に大挙して入ってきた外国メディアから絶賛されたのは、海外だったらこうした無秩序状態でおこりうる略奪も暴動もなく、被災者が避難所できわめて冷静にかつ整然と行動していたことです。

今回の自粛もそうですが、命令があつたわけでもないのに、いったいなぜこういった行動を取れるのでしょうか。僕の答えは簡単で、日本には海外、とくに欧米には存在しない「世間」があるからです。震災で「法のルール」がまったく機能を失っても、避難所では被災者の間で自然発生的に「世間のルール」が作動していたんですね。ところが欧米には社会はあるが、「世間」がないために、震災などの非常時に警察が機能しなくなり、社会のルールである「法のルール」が崩壊すると、略奪や暴動に結びつきやすい。アメリカなどで災害時にスーパーなどが襲われ、商品が略奪されるのはそのためです。

鴻上 肝心なのはそこです。「世間」と「社会」はどこが違うのか。

佐藤 それがいかに重要で、日本においては、「世間」と「社会」の違いこそが、ありとあらゆるものの原理となっているのですから。

鴻上 おそらく学者である佐藤さんと、作家である僕では、語るべき言葉の質が違うと思います。僕は僕からその違いについて説明させてください。僕がいつも単純に説明しているのは、「世間」というのは現在及び将来、自分に関係がある人たちだけで形成される世界のこと。分かりやすく言えば、会社とか学校、隣近所といった、身近な人びとによってつくられた世界のことです。そして「社会」というのは、現在または将来においてまったく自分と関係のない人たち、例えば同じ電車に乗り合わせた人とか、すれ違っただけの人とか、映画館で隣に座った人など、知らない人たちが形成された世界。つまり「あなたと関係のある人たち」で成り立っているのが「世間」、「あなたと何も関係がない人たちがいる

注1 バッシングの度を越して非難すること。

注2 SNSはツイッター、フェイスブック、ラインやインスタグラムのように、登録した利用者がインターネット上で交流できる会員制サービスのこと。

世界」が「社会」です。ただ、「何も関係がない人」と、何回かすれ違う機会があり、会話するようになっても、それはまだ「社会」との関係にすぎませんが、やがてお互いが名乗り、どこに住んでいるということを語り合う関係に発展すれば、「世間」ができてくる。

佐藤 日本人は「世間」に住んでいるけれど、「社会」には住んでいない、ということですね。

鴻上 はい、昔からよく言われますね。エレベーターなどで知らない人と同乗すると、日本人は互いに何の会話もしないまま、光る数字を見上げていたりとか。同じ「世間」の人ではないからですね。

佐藤 欧米の人はホテルの廊下ですれ違った際にも挨拶をしますね。

鴻上 何で僕が「世間」と「社会」の違いを言い続けているかというところ、今は「世間」というものが中途半端に壊れてしまっていると考えているからなんです。たとえば江戸時代——いや、明治から大正、昭和の終戦前後まで含めてもいいと思っっているのですが、隣近所とお米とかしょうゆの貸し借りが都会でも当たり前のようにおこなわれていました。まだ「世間」が十分に機能していたんですね。「世間」がいわゆる「セイフティーネット」の役割を担っていて、同じ「世間」に生きる人を守ってもくれているのです。

ところが、「世間」が中途半端に壊れてきた今は結局、守ってくれるものが中途半端な人たちでしか存在しない。だから、僕たちがつながらなければいけないというか、手を伸ばさなければいけないのは、「社会」という自分とは無縁の人たちの世界で、その人たちとどう関係をつくっていくか。そこには日本人の未来はないんじゃないかと思っっているのです。

(中略)

鴻上 では、よく言われる、「ウチとソト」と「世間と社会」の違いというのは、佐藤さんはどう説明していますか。

佐藤 僕はこう言うんですよ。社会というのは、原理的に一つしかないんです。一つしかないものにはウチもソトもないわけですよ。たった一つしかないものにはウチもソトもない。だから社会はあまり排他的にならない。ところが「世間」というのは、小さいやつから大きいやつまで、たくさんあるんですね。たくさんあるから、外側と内側の区別が互いの世間の間でできてくる。排他性も生まれてきたりするわけです。

鴻上 僕が世間と社会の説明をすると、「それはつまり、ウチとソトのことでしょう。ウチが世間で、ソトが社会なんですよ」とよく言われたりするんですよ。

佐藤 日本ではね。

鴻上 そう、日本では。日本人だと、ウチソト論というものが結構有名じゃないですか。自分が関係している世界をウチと呼び、それ以外をソトと呼ぶ。ウチソト論と、僕らが今言っている世間・社会論とは、どこが違うと思いますか。

佐藤 基本的に「世間」のあるところでは、「世間」の内側は身内ということですよ。ね。「世間」の外側は何かというと、赤の他人。

鴻上 うん、ソトですね。

佐藤 赤の他人とか、ソトの人を「外人」という言い方もしますね。結局、世間の内側の人間に対しては非常に親切にするけど、外側の人間に対しては無関心か排除する。これが基本的な構図です。それ

で、日本人は社会に生きていないから、「世間」のソトにもやはり違う「世間」があつて、そこでもウチとソトをつくっている関係じゃないですかね。「世間」の外側が社会になっているということではなく、たくさん「世間」があつて、それがお互い鳥宇宙みたいな感じで存在している。

鴻上 つまり、ウチとソトという単純な二分法ではないということですか？

佐藤 うん。つまり、こういうことなんです。例えばパブリック (public) という言い方があるじゃないですか。パブリックというのは、日本では「公共」と訳されていて、公共というのは公共事業とか、公共団体とか国家とか、そうしたものを意味する。しかし、パブリックの本来の意味は社会に属する概念で、しかも国とか、オフィシャルなものとは対立する人びとのつながり。それが公共、パブリックなんですよ。これは「世間」全体を横断的につなぐ原理です。ところが日本では、「世間」のウチとソトの意識が強いため、共通の原理であるパブリックが成立しにくい。

鴻上 パブリックとは、すぐに国家だと思っちゃうわけですね。

佐藤 「社会」の話に戻りますと、欧米では殺し合いを避けるために法律ができた。アメリカは訴訟社会と言われるわけですが、法律以外に頼るもの、基準となるものがないんです。あれだけ多民族社会になって、宗教も違うし、物の考え方も違うし、目の色も違う。そういう人間が集まったときに、最終的に解決する方法は法律しかない。となれば、「社会のルール」というのは「法のルール」なわけです。ルール・オブ・ロー (Rule of Law) と言いますが、「法の支配」という意味です。

東日本大震災のときに海外メディアが避難所に避難している被災者の冷静さを見て、絶賛したという話をしましたが、では、欧米ではどうなのか。アメリカではハリケーンなどが起きると、スーパーマーケットが襲われたりするわけです。

(中略)

ところが日本の場合、なぜ被災者があんなに冷静に行動できたのかといえば、「みんな同じ」ような悲惨な状況に置かれた場合、「みんな同じ」という同調圧力が働く。自分がこういう状況でも「しかたがない」と考える。「世間のルール」が働くんですね。だから、避難所に来ると、「おまえはトイレ掃除」とか「おまえは食事担当」とか、そういうかたちで任務分担をしちゃうわけですよ。これは国家や政治権力のような、上から降りてきて法律や暴力によって命令し、抑圧するような権力とは違うわけです。「世間」の関係性もたらす権力というか、フォーコー (Michel Foucault) は「網の目としての権力」という言い方をしていますが、それに近いかもしれないです。

だいたい、小学校、中学校で生徒に学校の清掃をさせるといのは日本だけでしょ。

(中略)

そういうかたちで、小さいころから「世間のルール」を学んでくる。そうしたルールを学ぶことで、強い同調圧力が形成される。警察が機能しなくなって「法のルール」が崩壊しても、結局、「世間のルール」が働いて、略奪も暴動も起きない。これが、日本が世界中で一番治安がよくて安全な国と言われていることの理由だと思うんですね。

でも、それは果たして良いことなのか、後で話したいと思います。

(鴻上尚史・佐藤直樹「同調圧力 日本社会はなぜ息苦しいのか」による)

複雑きわまる現代の社会は問題が山積みだから、これらの問題を解決するために、科学の専門的な知見をどのように使っていくのかは緊急の課題だ。

たとえば、ほくがこれを書いているのは二一世紀に入って二〇年が過ぎたころ、豪雨や猛暑、寒波などの異常な気象現象が増え、経済格差が広がって社会の分断が広まり、**B** 未聞の感染症（COVID-19）に世界中がおののいているときだ。二〇一一年には、東日本大震災と福島第一原発事故もあった。いずれも、専門家の知見を政治や社会の対応に反映させる際に、さまざまな不具合が生じた。

新型コロナウイルス感染症に関していえば、日本に限らず世界中で同じ問題が露呈した。アメリカには疾病対策予防センター（CDC）という司令塔があり、イギリスには政府の首席科学顧問がいる。いずれも、権限を集中させて専門家の中での意見のバラツキによって混乱しないよう「ワン・ボイス」を発信し、それを政治の中枢と密接に連携して具体的な対応に落とし込んでいくためのしくみだ。しかし、うまく機能しなかった。

日本も、専門的知見の活用がうまくいっていないことにかけては最右翼だ。そもそも日本には、首相の科学顧問もいなければ、その分野の専門的知見を集約している集中センターもない。なにか事が起こるたびに、そのつど臨時で当該分野の専門家を集めた会議体が形成されて、権限も責任もあいまいなまま、対応が進んでいく。

なかばボランティアのようにして関係省庁や関係者たち（新型コロナウイルス感染症でいえば、保健所や病院などの医療従事者たち）がものすごいがんばりを見せ、どうにかこうにか難局を乗り切っていく。毎回こういうパターンだ。

日本らしいといえば日本らしいが、もう少し専門知をうまく活用することを考えないと、これから先、さらに大規模な未知の災害が生じたときに、対応しきれなくなつて破局を招いてしまうのではないか。専門知を活用する制度をある程度整えてきた欧米諸国ですら、新型コロナウイルス感染症では機能しなかったのだ。ましてこれらの制度の整っていない日本にはこの先、さらに良くない状況が生じるのではないか。

日本社会は社会的同調圧力——ムラ意識——が強いのと、前にも述べた公的空間と私的領域の境目があいまいなこととから、専門的機能を公共のために使うことに、あまり熱心ではないところがある。

（中略）

新型コロナウイルス感染症への対応がうまくいったのは、韓国や台湾など、少し前に重症急性呼吸器症候群（SARS）、中東呼吸器症候群（MERS）などのコロナウイルスによる感染症で打撃を受け、その際の失敗から体制を整えて準備ができていた国か、あるいはニュージーランドのように首相のリーダーシップが明確で成功した国である。つまり、専門的知見があるかないかではなく、それを活用できるかできないかが、分かれ目なのだ。

今まで自分たちがやってきたやり方のまま進んでいくならば、専門的機能はいらぬ。むしろ、組織

に入ってから、そこでの仕事をこなしながら身につけていくことこそが、その道でうまくやっていくための「専門性」だったのかもしれないが、異業種・異文化間での人と情報のやりとりが圧倒的に多数になっている今、そのような内輪の論理だけではもはや立ち行かない状況になっているのは明らかだ。文化や文脈に依存する暗黙知的な「場の力」は、それはそれで強力ではあるけれども、それだけではなく、普遍的な場面でも効力を発揮する科学や技術の専門的知見をどれだけ有しているかが、なにより資産になるはずである。

これは、課題に事後的に対応する場合だけではなく、この先の組織や社会をどうデザインしていくかについても大きな役割を果たすはずだ。

（佐倉統「科学とはなにか 新しい科学論、いま必要な三つの視点」による）

問一 ——線部①「『空気を読め』の風潮」とありますが、「文章2」ではこれをどのように言っていますか。「文章2」から二十字で探し、初めと終わりの三字を抜き出して答えなさい（句読点・記号も一字に数えます）。

問二 ——線部②「コロナは、」とありますが、この表現がかかっている部分としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 存在する
- イ あいまいにしていた
- ウ 突きつけた
- エ 気がします

問三 ——線部③「感染者やその家族に向けられた差別やバッシング」とありますが、それが日本で起こるのはなぜだと考えられていますか。その理由を四十文字以上五十文字以内で答えなさい（句読点・記号も一字に数えます）。

問四 **A**・**B** に入れるのにもっとも適切な漢字二字をそれぞれ答えなさい。

注3 知見（知識や見識のこと）。

注4 ワン・ボイス（ここでは「統一された意見」のこと）。

注5 普遍的（全てのものに当てはまること）。

問五 — 線部④「日本人は『世間』に住んでいるけれど、『社会』に住んでいない」とありますが、それはどういうことですか。その説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本人は、略奪や暴動を恐れるあまり、知らない人たちとの関係を避け、身近な人びとと世界を形成しているということ。
- イ 日本人は、新しい人たちとは挨拶をし、付き合いをしても、そうでない人たちとは関係を築こうとはしていないということ。
- ウ 日本人は、非常時でも自然発生的にルールを作る能力に優れ、欧米人のように法律でルールを決めて行動していないということ。
- エ 日本人は、文化的に成熟していないので、自分とは無縁の人びととのつながりを大切にすることをまだ作っていないということ。

問六 — 線部⑤「僕らが今言っている世間・社会論」とありますが、それはどのような考え方ですか。その説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 世間のウチ側の人間に対しては非常に親切にするが、ソト側の社会の人間に対しては徹底的に排除するものだという考え方。
- イ 自分と身内が所属している世間のソトにも世間があつて、そのたくさん世間が集まることで社会ができるという考え方。
- ウ 世間とは人間をウチとソトに分けるので排他性を持ち、社会とは人間のつながりを横断的に一つにつなぐものだという考え方。
- エ 自分と関係のある人間からなるウチの世間と、無関係の人々からなるソトの社会は互いに排除し合う、緊張感ある関係だという考え方。

問七 — 線部⑥「社会の話」とありますが、対談者の一人である佐藤さんが考える「社会」とはどのような場ですか。二十五字以上三十五字以内で答えなさい（句読点・記号も一字に数えます）。

- ア 同調圧力でスマホを持つこともあるんじゃないかな。周りのみんながスマホでやりとりをしていると、自分もスマホを持たないといけない気分になるよ。
- イ スポーツの先輩・後輩の関係もそうだよね。練習メニューなんかをもう少し合理的にしようと思案したら、うちの伝統だと反対されるのもそうかな。
- ウ いい部分もあるって言うていたね。多くの人が率先してマスクをしているのは、同調圧力の影響とも考えられるよ。マスクの着用率が高いことが海外の人から驚かされているんだってさ。
- エ 他にも治安の良さや礼儀正しさがいい部分なんじゃない。日本だと、落とした財布が自分の手元に戻る可能性が高いつて、僕も海外の人から聞いたよ。
- オ 犯罪率の低さも監視の目があるからかしら。でも募金した有名人がネットで偽善だ売名だと大勢からたたかれることがあるのは、同調圧力の悪いところね。

問八 次の会話文は、本文を読んだ生徒たちが同調圧力によって起こる行為をテーマに、話し合っている場面です。本文の趣旨に合わない発言を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本では食べ物や物の貸し借りが自然に行われるなど、隣近所の論理が身内である人々の生活を守ってくれる反面、この論理は、その道でうまくやっていくという専門的技術を身につけるには不適切である。したがって、今後は組織や世間を大きく作り変える努力が不可欠になっていくことだろう。
- イ 日本では「空気を読め」という風潮によって、異論を許さない息苦しさや国全体を包んでいるとはいえ、社会的同調圧力によるプラスの効果である現場のがんばりや人々の絆で、専門家なしでも今後も問題は解決していくことだろう。したがって、この先の日本社会や組織は希望に満ちている。
- ウ 日本では食べ物の貸し借りが自然に行われるなど、隣近所の論理が身内である人々の生活を守ってくれる反面、この論理は、その道でうまくやっていくという専門的技術を身につけるには不適切である。したがって、今後は組織や世間を大きく作り変える努力が不可欠になっていくことだろう。
- エ 日本では警察が機能しないような危機的状況になったとしても、同調圧力により世間に治安が保たれる一方で、そのような同調圧力が強力であるあまり、専門的知見を用いることが阻害される。しかし、専門的知見は、問題解決や将来の在り方を考えていくのにたいへん重要である。

問九 「文章1」・「文章2」から読み取れる内容としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本では周囲と同じように行動するように強いる空気から、差別やバッシングが起きるのに加え、他国同様、ムラ意識の強さにより専門家の意見を一つにまとめて政治の中枢と密接に連携することがさまたげられる。しかし、専門家の意見は未来のデザインのために必要になるはずだ。
- イ 日本では「空気を読め」という風潮によって、異論を許さない息苦しさや国全体を包んでいるとはいえ、社会的同調圧力によるプラスの効果である現場のがんばりや人々の絆で、専門家なしでも今後も問題は解決していくことだろう。したがって、この先の日本社会や組織は希望に満ちている。
- ウ 日本では食べ物や物の貸し借りが自然に行われるなど、隣近所の論理が身内である人々の生活を守ってくれる反面、この論理は、その道でうまくやっていくという専門的技術を身につけるには不適切である。したがって、今後は組織や世間を大きく作り変える努力が不可欠になっていくことだろう。
- エ 日本では警察が機能しないような危機的状況になったとしても、同調圧力により世間に治安が保たれる一方で、そのような同調圧力が強力であるあまり、専門的知見を用いることが阻害される。しかし、専門的知見は、問題解決や将来の在り方を考えていくのにたいへん重要である。

(以下余白)

